

平成26年3月発行

浜松市東区

# 笠井街道をゆく

浜松宿から笠井の市に向かう人々が使っていた旧笠井街道は、現在の笠井街道の道筋と多少異なっている。姫街道と重なる部分もあり、当時の市宿野は姫街道や笠井街道を通る人たちが賑わっていた。明治40年(1907)頃に現在の道筋になった。



かさい いち 笠井の市

笠井は南の浜松宿、北の二俣の市の中間に位置し、江戸時代には、流通の拠点として大きな役割を果たした。市は六斎市といひ、毎月1・5・10・15・20・25日の6回開かれていた。市の当日には、笠井や近郊の人はもちろん、浜松の商人も多く訪れ、道の両側にある店を借りて高売をした。特に、塩は浜松の塩町の専売だったため、多くの人が塩を求めて訪れ、笠井の市の繁栄の大きな要因となった。また屋号に、帯屋という仕出し屋、鍋屋という呉服店、油屋という洋品店など、一見すると別の店のように思われる屋号があるのも特徴である。

- 🏯 神社
- 🏪 寺・地蔵
- 🏰 史跡ほか
- 🌳 保存樹林
- 🚧 道標
- 🗿 碑・塔
- 🏠 総合案内板
- 📖 資源解説板
- 🏠 公共施設
- 🏠 学校
- 🏠 コンビニ
- 🏠 郵便局
- 🚒 消防署
- 🏠 公園
- 🚦 交番
- 🏠 休 小休み処
- 🌳 公園
- 🏠 公共施設
- 🏠 学校
- 🏠 コンビニ
- 🏠 郵便局
- 🚒 消防署
- 🏠 公園
- 🚦 交番
- 🏠 休 小休み処

※旧笠井街道は明治23年測量の陸地測量部地形図を参考に現在歩ける道にあてはめた道筋です。

**多田足穀碑 3**  
 本天平八翁(1832~1911)が行った畦畔改良(耕地整理)の顕彰碑で、「多田足穀」の意味は、「田(畑)を多くして穀を満たす」という意味である。本天平八翁は、先祖伝来の田畑を大事にする人々を根気強く説得し、耕地整理を実施した。それにより、田畑の生産性は飛躍的に向上し、貧しかった村は豊かになった。この業績が各団体からたびたび表彰されたことを記念して、明治23年(1890)に碑が建てられた。

**宝珠寺の岩戸観音堂 2**  
 岩戸観音堂は約200年前に、当時の住職が岩戸観音を背負い托鉢をして、建立した。天井には花鳥木や日常用具が描かれた格子天井画が見られ、正面の欄間の須弥壇に岩戸観音が祀られている。お参りを続けると目が見えるようになったり、足の痛みが取れて歩けるようになったりすると信仰を受けている。



**旧笠井街道 道標 1**  
 笠井街道は浜松宿・浜松城下と笠井を結ぶ道であり、かつての笠井街道は丸塚の西側を通り、馬込川の東側(現在の木戸町)で東海道とつながっていた。この道標は元は現在地より南側の旧笠井街道の道沿いに建てられていたが、道路の整備に伴い、十輪寺に移転された。

**軽便鉄道**  
 かつては西ヶ崎から笠井まで、軽便鉄道が走っていた。(笠井線)また、区内には中野町線も走っていた。笠井線は大正3年(1914)に開通し、昭和19年(1944)廃線になるまで、朝5時から夕方5時まで1時間に1本の客車が走った。万歳と女学校前(現在の笠井中学校前)に停留所があった。

**春日神社の灯笼群 9**  
 春日神社は文明14年(1482)、室町幕府第九代将軍足利義尚公が創建、天文10年(1541)今川義元公が社殿を造営し、社領を寄付したと伝えられている。参道には36基の灯笼群がずらりと並び、最も古いものは宝永3年(1706)に奉納されたものである。また明治から昭和初期までに19基の灯笼が奉納されており、当時の笠井町の町工業の発展が神社への灯笼の奉納を促したと考えられる。

**福来寺(笠井観音) 10**  
 江戸時代から多くの人が笠井街道を通り六斎市へ訪れ、笠井の綿織物は発展した。その市が引き継がれ、現在も毎年正月十日は観音様の縁日と初市が開かれ、多くの人が訪れる。だるまを売り始めたのは明治24年(1891)頃から、出店でだるまを買い、観音様で左目に墨を入れ、ご祈禱して頂くのが慣わしである。

**風船落下の碑 8**  
 昭和37年(1962)に福井県武生市(現在の越前市)の武生東小学校3年生の児童が風船に手紙を付けて飛ばし、それを積志小学校の児童が拾ったことがきっかけで、二つの小学校の交流が始まった。石碑は交流15周年を記念して建てられたもので、現在でも両校の間では文通や交歓会などの交流が続いている。

**宗安寺と市野惣太夫 7**  
 宗安寺を建立した中心人物である市野惣太夫は、家康公に仕えていた。馬役のかたわら代官も務め、市野村をはじめ近隣の村を治めたと伝えられている。

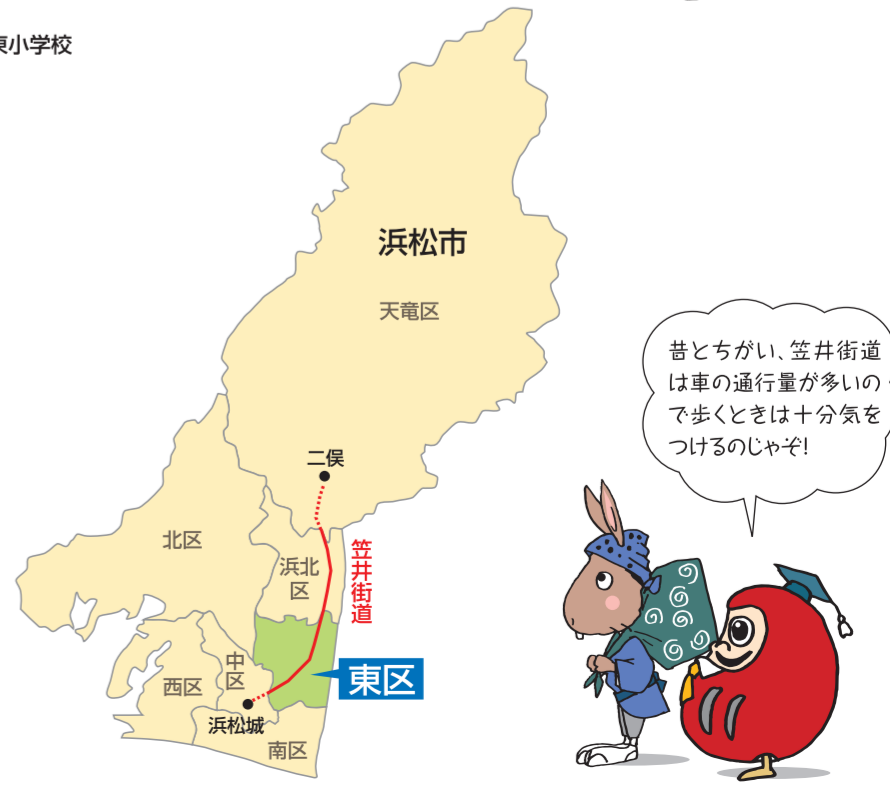
**焼堂跡 6**  
 明治時代後半までお堂があり、僧侶が衣替えをして檀家にお経をあげに回った場所だった。その後、お堂は火災に遭い「焼堂」と命名された。現在はお堂が残っており、毎年7月24日に施餓鬼会が行われている。

**今芭蕉と言われた松島十湖翁**  
 嘉永2年(1849年)豊田郡中善地村(現在の豊西町)に生まれた十湖翁(本名 吉平)は、幼い頃から国学や経典を学ぶとともに、俳諧の道にも進んだ。若くして県議会議員や引佐龜玉郡長を務め地域の発展に尽くした。俳諧では全国に一万人の門人がおり、句碑も多数残している。豊西町には十湖橋や十湖池など、十湖翁にちなんだ地名が残されている。

**竹山平左衛門と鷹宿梅**  
 家康公は領地の巡視と住民の気持ちをつかむため、鷹狩りを頻りに行ったそうである。鷹狩りの際、家康公は竹山家を訪れ、梅の木を植えて「鷹宿梅」と名付けたと言われている。

**遠州報国隊記念碑 4**  
 遠州報国隊は、遠州地方を中心とした民兵隊であり、幕末に倒幕軍の東征に応じた。隊員は江戸で幕府側の彰義隊と戦い、浜松に弾陣した。これを記念して碑が建立された。

**蒲桜伝説**  
 (蒲桜の見頃は3月下旬~4月上旬)  
 今からおよそ800年の昔、蒲の地で育てられた源氏の貴公子、蒲冠者範頼は、兄頼朝の挙兵に応じて関東に向かう時、大好きだった桜の苗木を持参して、自分の居城に植えた。これを蒲桜という。今も埼玉県北本市にあって「石戸の蒲桜」という。樹齢800年、やがて頼朝公は平家追討の総大将として上洛。その途上、三重県鈴鹿市の石薬師に立ち寄り、戦勝祈願をした。その時蒲桜でこしらえた鞭を逆さに立て「もしも戦に勝たなければ、きつと生きよ」と言って、大地に突き挿した。幸い源氏は大勝利を収め、蒲桜が芽を吹き、今に至ると伝えられている。これが「石薬師の蒲桜」である。石薬師の昔まごの厚意によって石薬師の蒲桜の里唄りが実現し、蒲地区の各地に花を咲かせている。



昔とちがひ、笠井街道は車の通行量が多いので歩くときは十分気をつけるのじゃぞ!